

## 香下かしたの観音かんのんさん（香下）

仏教が日本へ伝わって間もないころのお話です。

羽東山つつかぎんという山は、靈験あらたかな山だといわれています。

あるとき、日羅上人にちらしやうじんというとても偉いお坊さまが、海を渡り、はるばる日本にやって来られました。明石の海上からこの峰みねをごらんになりますと、紫に雲がたなびき、紫色に輝いていました。

「やや、あの峰にうつすらと輝くのは何か。大きな靈力を感じることもよ。」

上人は、この紫雲しうんの光明こうみやうに引きつけられるようにして、ここ羽東の地にやって来られたのでした。以来この山で修行じゆに励はげまれました。

ある日、上人がうつらうつらしていると、人のようなふしぎな影が現れました。

「この木は光明を発するだけでなく、刻むごとに香りを出す。この木を刻んで仏を現し、この寺の本尊ほんぞんにしたきものなり。」

上人は、答えました。

「それはすばらしい。私の求めていることです。」

「ならば、人々の苦しみを思いながら刻め。人々が救われ、心安らかになるように願って彫られよ。」

上人は、はつと目が覚めました。

上人は、あのお告げを信じて山の中を歩き、すばらしいにおいのする木を探し当てました。そして、一心に刻み始めました。人々の苦しみを思いながら、苦しみを与えるものは何なのかを考えながら、彫り進めました。一彫り刻むごとに光沢こうたくが出てきます。何とも言えないよい香りも増してきます。上人は、心をこめて刻んでいきました。しだいに十一面千手せんじゆの観音菩薩かんのんぼさつどう像になつていきました。

できあがった観音菩薩は本尊として、本堂におさめられました。また、観音像を彫ったときのかぐわしい香りは、山すその村々にまで漂たふよったということです。それ以来この地を「香下かした」、この寺を「香下寺」と呼ぶようになりました。

さて、ときの帝みかどが病の治療のため有馬あうまへ湯治とうじにこられていました。遠くを眺ながめると、なにやら羽東山のあたりに紫の雲がたなびき、ほのかに光り輝いているようです。

「これは、ふしぎなことであるなあ。」

家来の一人が申し上げました。

「香下寺のあたりです。香下寺は日羅上人が香木で十一面観音を彫られたというお寺です。」

「それは、霊験あらたかなことよ。誰か私の代わりにお参りして祈願せよ。」

使者がさつそく出立しました。有馬から山口、道場を過ぎ三田、三輪を通って香下村へやって来ました。麓で一休みして、やっと登ることができました。手を清めて観音様の前に進み出ました。帝に代わって祈願するという大切な役目です。帝のご健康と治世の平穩を幾重にも祈願したのでした。

その願いが聞きとどけられたのでしょうか。帝はたいそうお元氣になられ、国もよく治まったということです。この後、香下寺は霊験あらたかであるということが広く伝わり、勅願所となり、多くの人の信仰を集めるようになりました。

南北朝時代のことです。戦火にあい、お寺が燃えてしまいました。お坊さまたちはこの観音様も燃えてしまったものとあきらめかけておりました。そのとき、ふしぎなこと

に観音様のおられたあたりから白い煙が一筋上がっていたのです。お坊さまたちがあわてて掘り起こしてみると、観音様の焼けこげた台座がでてきたのです。きつと観音様がお知らせにいられたのでしよう。その後、人々は山上に観音堂を建て、その台座と新たな十一面千手観音様を大切にまつりしたということです。

その後、観音信仰が盛んになり、「香下の観音さん」と親しく呼んで、多くの人がお参りするようになったということです。

